

K-822

上遠矢塚古墳 調査報告書

1978. 11. 1

天童市
上遠矢塚古墳調査団

上遠矢塚古墳調査報告書

1978. 11. 1

天 壇 市
上遠矢塚古墳調査団

4. 上遠矢塚古墳の調査報告

例　　書

1. 本編は、昭和50年11月22日より24日までの予備調査団の発掘成果に基づき、天童市が主体となって第一次（昭和51年8月15日～23日）及び第二次（昭和51年10月30日～11月4日）発掘調査を実施した天童市上遠矢塚古墳の調査報告である。
2. 本編の編集は、主として川崎利夫が行った。
3. 本編の執筆は、調査団長の柏倉亮吉、調査主任の川崎利夫、調査員の畠田俊雄、中島寛、安彦政信、野尻侃、保角里志があり、分担ごとに文末に記した。
4. 写真撮影は主として天童市役所企画広報課職員及び川崎利夫があたり、遺跡・遺物の実測図の作製は野尻侃、安彦政信、保角里志が行った。
5. 上遠矢塚古墳の発掘調査及び本編の編集にあたり、公私多数の機関や諸氏の御協力をいたいたい。記して謝意を表す。

山形県教育委員会文化課 天童市教育委員会 天童郷土研究会
 山形大学教育学部歴史学研究会 さあ～い同人会 天童市立第三中学校郷土研究クラブ
 小山田泰義氏（土地所有者）五十嵐義太郎氏（土地所有者）
 高橋俊一氏、伊藤久兵衛氏、土屋健吾氏、森生田兵治氏。
6. 本報告書をそのまま「天童市史 別巻上」に収録することにした。

はじめに

わが出羽国には、8世紀の初めに出羽国が建置（712年）され、それ以来一つの行政区画となつた。このことは、わが郷土が、畿内にあった中央政府の支配体制の中に組み込まれた具体的な所であるといえるだろう。したがつてそれ以後の郷土の事は、大した頻度ではないとしても、中央政府の諸記録にしばしばそれが現わしている。しかし、考えてみると、一つの歴史事象が起るためには、緩であれ急であれ、それに応する経過・段階を踏まずには居るまい。天離るあずまの地域が中央政府の行政区画に入ったというには、それに値するだけの、人と産業とがあつて然るべきだろう。そうだとすれば、その社会・生産はどんなことがたなのか。この疑問に答えるためには、古墳文化の解明こそなされなければならない事なのである。

本県の古墳文化の調査は、昭和12年の西村真次博士の著述以来、数々の論著・市町村史等によって、次第に精密度を高くして來た。しかしこの上遠矢塚古墳に関しては深く立ち入ったものがなかった。それにも関わらず、現実には、立谷川扇状地の扇端部一帯に群在したかつての古墳の大部分が埋没してしまった中にあって、強り、平面的にはほぼ全形を保っていること、またその規模が県下古墳群中、大型の部類に属していること、等の点で、極めて注目すべき古墳であると思われた。調査の結果もこの期待をおおむね裏切らなかつた。

この古墳が解明されたことは、ひとり、この地域の古い文化を明らかにしただけではなく、更に広く、既知の古墳群と相並んで、出羽国建置に先立つ数世紀間の本県地域の社会・文化を、われわれの眼前に明らかにしてくれたのである。

いま、報告書をまとめるに当り、ここに至るまでのご支援をいたいたいた天童市当局、天童市史編さん委員会の方々が、現地で調査に協力して下さった方々がたに、調査団を代表して、心からお礼を申し上げたい。

(柏倉亮吉)

(1) 上遠矢塚古墳の位置と環境



第319図 上遠矢塚古墳周辺の古墳と遺跡

奥羽山系に源を発する立谷川が西流し、山形市中野目付近で須川に合流する。

この立谷川が形成したのが立谷川扇状地である。

上遠矢塚古墳は、この扇状地の扇端近く、天童市大字高瀬字遠矢塚1295の5にある。奥羽本線、高瀬駅南西500メートル、長岡団地の西方に位置し、標高約113メートルのところにある。

奥羽本線の東側一帯すなわち扇状地内は、以前桑園か果樹園であったが、国道13号線の新設にともない、宅地造成によって奥羽本線と国道の間は、ほとんど宅地になっ

ている。

国道13号線の東側には、羽州街道以前の道路として「横街道」が通っていたことが知られており、近くには、県指定文化財の石鳥居がある。

長岡団地の東方には、中里A（縄文時代）遺跡、中里B（平安・鎌倉）遺跡があり、南には、石仏寺跡、永源寺跡、市指定文化財の六面幢や板碑などがある。

昭和52年度の「山形県遺跡地図」によると、扇状地の扇頂部には、縄文時代の遺跡が多く、大森A遺跡や上荒谷遺跡が縄文前期大木1、2式期の遺跡でもっとも古い。

国道旧13号線に沿って、弥生時代と古墳時代の遺跡が数多く発見されている。これらの遺跡のほとんどは、10数年前に行なわれた耕地整理の時に発見されたもので、水田から、川原石を組んだ石棺等も出土している。

立谷川扇状地の扇端にある古墳としては、上遠矢塚古墳（第319図7）下遠矢塚古墳（6）火矢塚古墳1号2号（8.9）衛守塚古墳群（13）柴崎古墳群（14）孤山古墳群（16）七浦古墳群（19）の7か所も数えられる。

以上のことから、扇端部の湧水を利用して、水田稲作に従事した“ムラ”があったと推定されよう。それらの“ムラ”を支配する豪族の存在も古墳の築造の点から裏づけされているといえよう。（相田俊雄）



第320図 低い墳丘を残す上遠矢塚古墳（諫路側から）

(2) 発掘調査にいたるまで

遠矢塚古墳についてのもっとも古い記録は、宝暦11年（1761年）3月の「高齋村明細指出帳」である。それに次のような記載がなされている^⑩。

一 塚二ツ有 遠矢塚也 内壇ツハ高サ壇丈五尺廻リ三拾間 壇ツハ高サ壇丈八尺廻リ三拾八間

現在の墳丘の大きさからいって、はじめのものが下遠矢塚、あとの方が上遠矢塚と思われる。天保九年4月（1838年）の「高齋村（北組）明細指出帳」にも同様の記載があり、前者を書き写したものと思われる。従って由緒ありげな塚の存在は既に江戸時代から地域の人びとによって知られていたのである。

その後、明治12年4月、明治天皇巡幸に先立って国道の改修が行われることになり、国道に近い上遠矢塚が採土のため掘り返された。その際地下5尺のところから、甲冑・刀剣・頭蓋骨・歯骨・瓦器、それに割竹型木棺など數十点の遺物が出土したと伝えられている。ちょうど同年の3月に、遠矢塚より立谷川を渡って2軒余り南に所在する山形市塗山の衛守塚2号墳も掘りおこされ、割竹型木棺をはじめ櫛・弓等貴重な遺物が出土し、それらは現在東京国立博物館に保管されている^⑪。しかしながら上遠矢塚の出土物は、その後全く行方がわからず、伝わっていない。

ところが上遠矢塚が掘られた明治12年に、5月3日の日付で次のような届が村役人から警察署へ提出されている。

埋蔵物発掘之儀ニ付御届

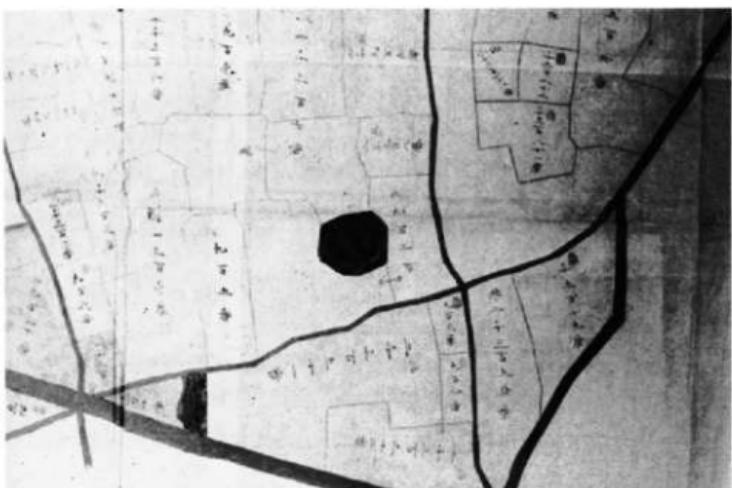
本年四月三十日道路修繕ノ為メ当村地内字遠矢塚ト唱フル古塚ヲ掘起候處、鑑、剣刀、甕、齒骨体1物品ヲ掘リ出シ候ニ付、別紙図面並現品相添此段御届仕候也

明治十二年五月三日

東村山郡高齋村戸長代理用係 佐藤正司
戸長岡崎左学

山形県警察署天童分署 御中

これは「明治十二年南高齋村諸願向届書」より抄写したものである。これによると遠矢塚が発掘されたのは、明治12年4月30日で、この折に鑑破片11個、剣2振、刀1振、甕の破片7個、人の臼歯3個と犬歯と思われる歯1個、その他土器の破片3個を発掘したという^⑫。それらの遺物は売却されたともいわれているが、とくに金目になるようなものは、この届書記載の限りではなかったようである。もっとも金の仏像を掘



第321図 遠矢塚付近地籍図(明治10年) (荻野和央氏蔵)

り出したとか、財宝めいたものをその後掘り出したといふい伝えはあるが、信憑性にとぼしい。付近には下遠矢塚古墳、火矢塚古墳群などもあるので、それらの何れかからかなりの出土物があったという可能性は否定できない。

上遠矢塚に相対して、現県道を越して200米西側にあったという下遠矢塚は、これよりも若干規模の小さい同じく円墳であったと思われるが、明治35年に高備小学校新築の際、採土のために掘りかえされ破壊されてしまったといわれる。出土物はなかったようである。明治34年奥羽線が開通し、上遠矢塚のすぐ側を線路が走っているが、その際も墳丘の東側の部分が壊され、若干の土採りも行われたらしい。こうして上遠矢塚は全面破壊をまぬがれたものの、度重なる受難の連続であった。しかしながら不完全ではあっても墳丘が現在まで残されていたことは幸いであった。今では天童市内で唯一の墳丘をもつ古墳である。

戦後遠矢塚についてふれた最初の文献は、川崎浩良「山形の歴史(上)」⁽⁴⁾であり、その後「天童の生い立ち」⁽⁵⁾、「高備郷土史」⁽⁶⁾でも本古墳存在の意義が述べられている。柏倉亮吉は「山形県の古墳」⁽⁷⁾のなかで「遠矢塚・火矢塚古墳」なる項目を設け、前記川崎浩良の記述にもとづき立谷川扇状地の末端に分布する古墳として両古墳の紹介を行っている。その後県内の古墳についてふれた諸論文中にも、この古墳の位置づけがなされ、県内の古墳のなかでは比較的古い型式として把握されてきた⁽⁸⁾。その論拠の一つ

は割竹型木棺の出土である。

ところが明治12年村役人から警察署へ届け出が出された書類中には、別に木棺の出土は記録されていない。あるいは同じ時期に山形市塗山の衛守塚2号墳より出土した木棺と混同され誤り伝えられたもので、実際には木棺の出土がなかったのではないかとの疑いももたれる。木棺が出土した旨の記録で最も古いものは、前記川崎浩良の「山形の歴史」である。それによれば、

(衛守塚古墳の記述のあと) なお同様割竹式木棺は、近くの天童市清池字遠矢塚と火矢塚よりも発掘され、遠矢塚から甲冑や刀剣の破片及び頭骸骨と歯とが発見された旨伝えられる¹⁰⁾。

のように述べられている。柏倉の「山形県の古墳」をはじめその後の諸説はこれにもとづいたものと思われる。川崎はじめ丸山茂らも当然現地調査を行い、明治12年の発掘に立ち合った古者の聞きとりによって記述したものと思われるが、なお検討の余地があるようである。

それに従来の大分の所見では、遠矢塚古墳、火矢塚古墳各1基づつ存在したような記述である。「山形県遺跡地名表」(昭37)にも、次のように記載されている¹¹⁾。

431	32	遠矢塚古墳	・高擧・遠矢塚南 893の5	宅地	平地 至105m	墳墓 (古墳)
432	33	火矢塚古墳	・清地・火矢塚 159の1	水田	平地 至105m	墳墓 (古墳)

(東印 海抜)

ところが、遠矢塚は先述のように上と下の2墳あり、火矢塚も2墳並存していたことが明治初年の地籍図及び現地調査や聞きとりによって明らかになった。即ち下記の通りである。

火矢塚1号古墳 天童市大字清池字火矢塚159 畑地

火矢塚2号古墳 天童市大字清池字火矢塚184 水田

それらを火矢塚古墳群と呼称したい。墳丘は何れも破壊されて残っていない。

以上のように、遠矢塚・火矢塚古墳群中、僅ながらも原形を保つのは上遠矢塚古墳のみであり、周濠の有無や現墳丘の状況・破壊度などを知り、古墳を含む地形測量を行うために、昭和50年11月22日より24日まで、予備調査が行われることになったのである。

(註)

- (1) 天童市史編さん委員会「天童市史編集資料第2号 村差出明細帳(2) 地誌書上」(1975. 11)による。

- (2) 東京国立博物館「東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(北海道・東北)」1968. 3。
- (3) 丸山茂「古墳調査の遺跡」羽陽文化24号。1954. 10。
- (4) 川崎浩良「山形の歴史(上)」1948. 12。
- (5) 川崎浩良・仲野半四郎・丸山茂「天童の生い立ち」天童町史編纂委員会。1952. 11。
- (6) 丸山茂・佐藤栄太「高橋郷土史」高橋村。1955. 6。
- (7) 柏倉亮吉「山形県の古墳」山形県文化財調査報告書第四輯。1948. 3。
- (8) 例えば
川崎利夫「辺境における古墳文化の特質」(「日本考古学の諸問題」所収)1964. 6。
加藤稔「最上川流域における古墳文化の展開」(「最上川流域の歴史と文化」所収)1973. 11。
東海林次男「出羽南半の古墳文化」山形考古2の4。1976. 5。
などがある。
- (9) 川崎浩良「山形の歴史(上)」P37。(川崎浩良全集2)。1964。
- (10) 山形県教育委員会「山形県遺跡地名表 埋蔵文化財包蔵地一覧」1963。
(地番に誤りがある。)

(川崎利夫)

(3) 調査の経過

昭和50年1月さあべい同人会主催による学習会で、東北地方における古墳の問題が出た。そのおり、長く研究者に知られていた上遠矢塚古墳は、古墳なのか、それとも塚なのか。古墳ならばどの時代のものか。内部主体は残されているのか。形態はどのようなものかなど、多くの疑問が出され、討論のうち発掘調査を実施することになった。学習会にアドバイザーとして参加された川崎利夫を中心として予備調査団を編成し、調査手続きの関係で50年度中に調査を実施するとの結論にいたった。最初に予備調査が実施されたのは、昭和50年11月22日～24日の3日間であった。

本格的な調査は、翌年天童市史編さん委員会が主体となり、柏倉亮吉山形大学名誉教授を団長に、川崎利夫ら予備調査を行ったメンバーが主要スタッフとなり、天童市教育委員会の協力を得て実施した。51年8月15日より23日までの9日間に第一次調査を、つづいて10月30日より11月4日まで6日間第二次調査を行ない、ほぼ発掘調査を完了することができた。

予備調査では、古墳であるかどうか確認すること、詳しい地形測量図を作ることを



第322図 発掘を
前にして挿入式

目標に実施した。比較的古い形式の高塚古墳の周囲には必ず濠がめぐらされるはずである。まず私たちは墳丘の中央を東西に切断するB.Cトレンチと、これに直交して南方にのびるAトレンチを作った。Aトレンチを掘り下げて行くと幅4m～5mにおよぶ周濠が土層の中にはっきりとあらわれた。そこで周濠のつづきを追求し、古墳の形態を確認するためにDトレンチを設定した。この結果Aトレンチでは周濠を確認し、墳裾部付近では葺石らしきもの認め、B、Cトレンチでは墳頂部に鉢巻状に礫石帯がめぐらされていることを確認し、DトレンチではAトレンチのつづきの周濠を確認し、古墳の形をおさえることができた。

そして、今後の課題として、周濠の精査と葺石の広がりの確認、礫石群の性格、周庭部の確認を行い最終的には造営方法、内部主体の把握の検討などを残して調査を終えた。

第一次調査の目的は①墳丘中段にある礫石帯が北半部まで続いているのか ②墳頂部にある葺石群の散布状況はどのような状態であるか ③北半における周濠の存在確認 ④正確な墳丘半径の測定 ⑤墳丘裾部から周濠部までの平坦部が周庭として存在したかどうかの5点であった。調査ではAトレンチとBトレンチ間を全掘し、A区と名づけ、礫石群の分布状況を確認した。また周濠の北部限界を確認するためにGトレンチを設定した。その結果、古墳の規模や葺石群の存在、土留めの礫石の存在などが明らかにされた。

しかし、この中でも墳丘造築法が充分に解明されておらず、推定しての造築法が提示されたにすぎなかった。また主体部分も明らかにされなかつた。

第二次調査では①北半に1本のトレーナーを設け、砾石群のめぐり具合を確認すること ②西側にトレーナーを設定して周濠を確認すること ③墳丘を切断し、造築時からの造築法を解明すること ④内部主体があるかどうか葺石を掘り下げることの4点を目的として発掘調査を行なった。

墳丘中央部にトレーナーを入れ、縦断して造築成法を観察した。又A区の葺石を3m×2mぐらいの範囲で掘り下げ、内部主体の解明を期したところ、攪乱されていることを確認した。

この調査には調査員の他、山形大学の学生諸君、天童三中の郷土研究クラブの生徒たちが参加し、さらに高齢の児童らが学習をかねて見学に訪れたりした。8月15日

第323図 発掘調査の状況



第324図 現地説明会





上遠矢塚古墳調査団名簿

団長	柏倉 亮吉
副団長	伊豆田忠悦、赤塚長一郎
調査主任	川崎 利夫
調査員	保角 里志、安彦 政信、相田 俊雄、野尻 仙、名和 達朗 中島 寛、宇野 修平
調査参加者	伊藤 悅子、長沢 礼子、佐藤 洋一、阿部 明彦、板垣 知明 石田 豊、舟山 義彦、及川恵理子、仲島 哲、渡辺 裕子 後藤 智子、山口 博之、今泉 信男、矢口 広道、会田 容弘 村山 正市、川崎 敏史
事務局	天童市役所企画広報課 阿部 安佐、水戸 秀一、山口 孝 千田 匠子

天童市教育委員会社会教育課 伊藤 博明、阿部 和美

の発掘調査の無事を祈願する地鎮祭と鍵入式には、阿部天童市長の列席のうえ古墳の靈をなぐさめた。8月21日開かれた現地説明会には80名の市民をはじめ、遠く米沢、東根などからの見学者もあった。私たちも「上遠矢塚ニュース」を連日のように発行し地域の人々も数多く参加し、ともに古代の歴史を考える学習の機会にしたのである。

以上の結果、従来の古墳発掘では、内部主体のみに終始し、周濠や外表施設、造築法などを徹底的に究明した例は県内ではきわめて乏しいのに対し貴重な発掘例となつた。

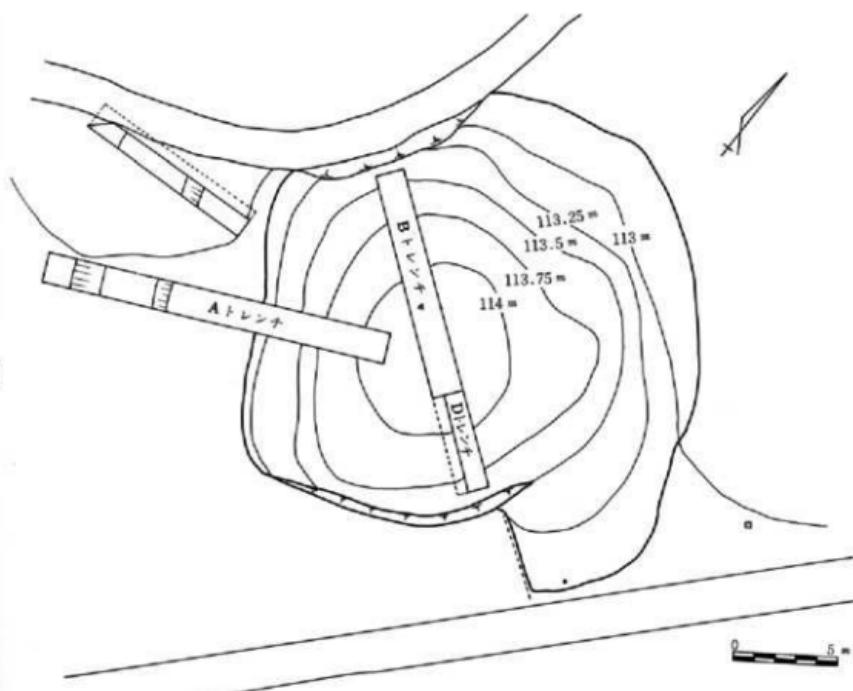
(中島 寛)

(4) 調査内容

1. 古墳の形状と規模

上遠矢塚古墳の墳丘は、土砂採取によって周囲から崩壊され、原形をそのまま保っていない。とくに南東部は国鉄奥羽本線により、また西部は農道によって大幅に削られている。

現状における墳丘は、基底部（径18メートル～24メートル）の不整円形で、高さは約1.4メートルある。（第7図）精査の結果その高さは不明であるが直径約24メートルの円墳であることが判った。さらに注目すべきことは、この墳丘をとり囲んで、内径28メートル幅約5メートル（4.8メートル～5.4メートル）深さ約0.5メートル（0.4メートル～0.7メートル）〔北側のみ幅6メートル深さ1.2メートル〕の周濠が、ほぼ円形にめぐら



第325図 上遠矢塚古墳墳丘測量図及び予備調査トレンチ配置図

されていたことである。ただし東側は国鉄奥羽本線のため確認できなかった。

規模は周濠も含めて径38メートルで、本県においては山形市菅沢古墳には及ばないまでも、平野部の円墳としては金原古墳(底径24メートル 高さ4メートル程度)と並ぶ最大級の古墳である。

墳丘の表土を剝いた状態で、墳頂部及び南西部に礫石が帶状につづいている。

調査の結果、南西部の礫群は後世の遺物を含み、かなり攪乱され、一部掘られた後、再び埋めもどされたものであることが確認された。またその他の礫群もかなり動いているが、中段のものは、当時は葺石状に敷きつめられ、土留めの役割をはたしたものと思われる。

残念ながら内部主体は、すべてを破壊され現在その形をとどめない。僅かに残る当時の手がかりは、明治12年5月3日山形県警察署天童分署へ提出された「埋蔵物発掘之義=付御届」の記録のみである。

調査の結果、墳頂部から南西約5メートル下った地点において、はっきりした盗掘溝が確認された。この部分の上部には礫が敷きつめられ、その中に陶磁器や中世陶器などの破片が多く混入し、さらに若干の骨片や鉄片を含んでいる。さらに礫をとり除くと木炭片があり、さらに墳丘の築造のポイントである黒色土層を掘り込み、次の層(灰黄褐色砂質土層)まで掘りこんでいた。平坦な基底部分にも陶磁器が混入し、後世の掘り込み(盗掘溝)であることが明確になった。またこの底部と上部の礫群の形は、ほぼ重なりあい、明らかに盗掘溝に礫を埋めどしたものと推定される。(安彦政信)

2. 古墳の外部施設

(1) 墳丘上の礫群

予備調査トレンチ内において、墳丘裾部から中段にかけて人頭大から拳大の自然礫が集中して検出された(325図)。このため第一、二次調査では礫群の分布状態を調査するためAトレンチとBトレンチの間を大きく広げ、(A区と呼称)、その礫群の広がりを確認した。その結果A区内の礫群はBトレンチ内で検出された礫群が幅約1.5メートルに細長く6メートルの長さで検出され、墳丘中段にはち巻き状に取り囲む石帯と考えられ、そのつながりと考えられる部分にF・G・Iトレンチを設置し、その状態を調査した。

各トレンチ内にはBトレンチで検出された状態と同様に人頭大の大きさから拳大の自然礫が幅の広いところで3.5メートル、せまいところで1メートル検出された。これらは表土下から第3層にかけて密に敷かれており、墳丘の土留めとしての葺石として

埋めこまれたものと考えられるが、全体の状態を把握しておらず明確ではない。

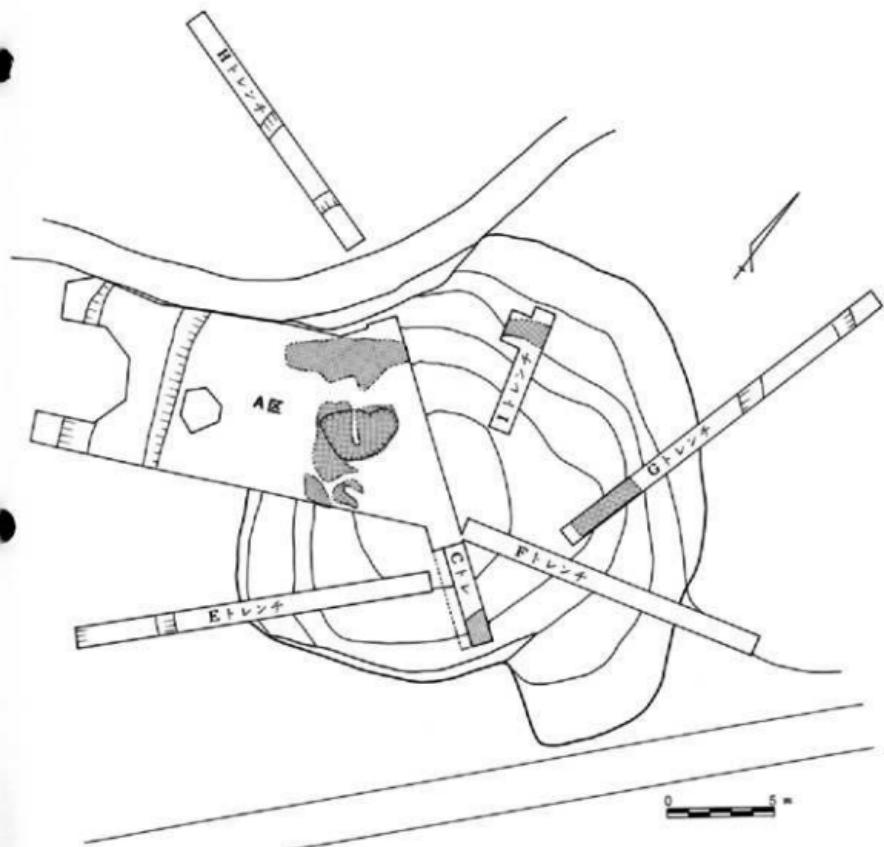
確認されているトレンチ内からみると、長径約15メートル、短径約13.5メートルに敷設しているものと考えられる。

出土遺物は、砾群の上面が後世の攪乱を受けており、全く出土物はない。

(2) 周 濠

周濠は墳頂部から放射状に設置した各トレンチ（A～Gトレンチ）内において確認された（第327図）。

各トレンチ内での周濠幅は約4.5～5メートルである。深さは地上層上面より60～80



第326図 上遠矢塚古墳の砾石帯と周濠

センチメートルのふかいもので、覆土は3つに分けられる第327図。覆土1層は黒色土で、赤色粒子や小砾を含み粘着性のある土層である。覆土2層は暗褐色土層で、赤色粒子、炭化物を含みやや固い粘性のある土層である。覆土3層は2層よりやや明るい暗褐色を呈し、赤色粒子を多く含み、地山の明褐色砂層に下部で漸移する層である。周濠の掘り込み状態は、墳丘内肩は急激に掘り込まれ、外提部に向ってゆるやかな立ち上りを示している。濠底は船底状を呈し、南部濠底内部には拳大の石が敷きつめられており、周濠の規模を確認することが出来た。

各トレンチ内の周濠を略測してみると、ほぼ円形を呈し、円径で27メートル、外径で約38メートルを測る。周濠は北部で巾が6.5メートルと広く、南部では4.5メートルとややせまくなる。深さも同様に南部であさくなり、北部では深くなる。周濠内では遺物の出土は顕著でない。(野尻信)

3. 墳丘の築成状況

墳丘の築成状況を明らかにするために、墳丘の中央部に東西に近く幅1.5メートルのトレンチを入れ、基底部まで発掘し、墳丘断面図を作成し、地層の観察を行った。(第328図)

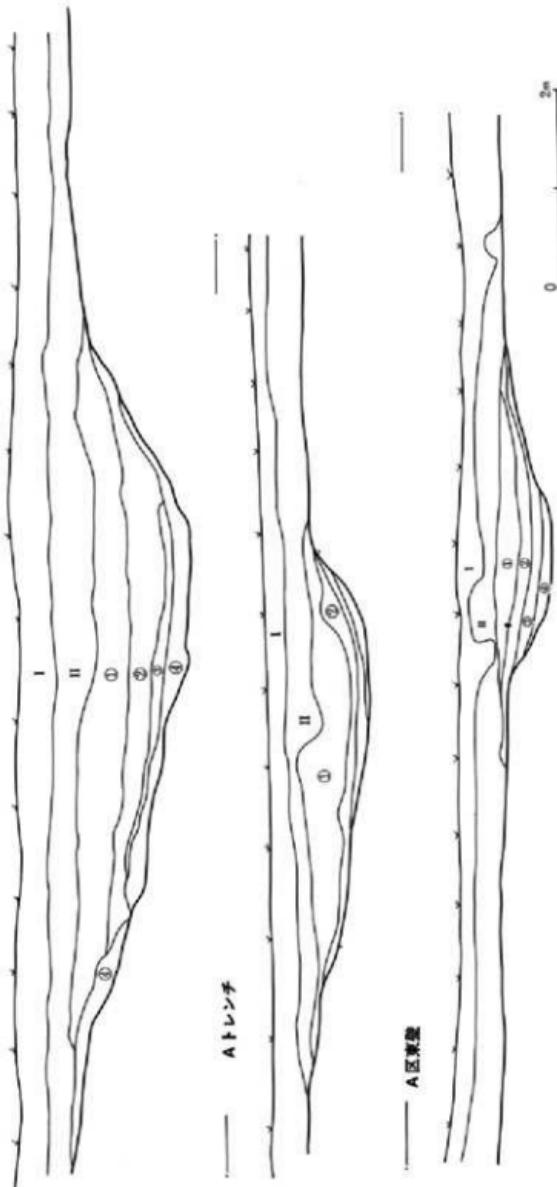
まず断面を基底部からみると、現在の墳頂部から約1.6メートルの深さのところが、礫(20センチメートル内外)を含む暗黃褐色砂質土層で、固く踏み固められており、これが基底部と思われる。この高さは西側のHトレンチ周濠の旧地表面と一致する。さらにその上に硬くしまった灰褐色粘土層が約15センチメートルの厚さで続き、さらにその上30センチの厚さで灰黃褐色砂質土層がある。

その上には固くしまった灰褐色粘土層約8センチがあり、さらにその上に墳丘築成のカギ層ともいいくべき黒褐色微砂層が20~30センチの厚さで続く。ここまでが一段目の構築であり、ほぼ水平に築成されている。

この上約80センチにわたって、意図的に約4分の1直角(22.5°)の傾きを持ち、10数回にわたって約8センチ前後の厚さで版築積層がみられる。これは自然のものではなく、明らかに人工的にしかも4分の1直角ということを意識して、かなり計画的に盛土を行なったものである。版築の跡をみると千数百年後の今日、当時この古墳築造に勤員された人々の姿が想像される。それは、土の運搬に使用した畚(もっこ)に土を入れ、それを一つ一つあけて少しづつ積み重ね、段々と高くしていく様子である。

残念なことに、墳丘の端部及び最頂部は削り取られており、墳丘の高さ及び正確な墳丘の大きさは不明であった。ただ周濠から割り出した墳丘の中心部との断面から割り出した中心部が、ほぼ一致することがわかった。(安彦政信)

G トレンチ実測



第327図 周溝断面図

I 表 土	(赤色粘子を含み粘性がある)
II 黒色土	(赤色粘子・炭化粘子を含み粘性がある)
① 黑褐色土層	(①層と似るがローム粒子を含みサクサクしている)
② 黑褐色土層	(赤色粘子・炭化粘子・細礫を含み粘性がある)
③ 黑 色 土	(赤色粘子・炭化粘子・細礫を含み粘性がある)
④ 黑 色 土	(粘性が強く下部では地山との漸移がみられる)

4. 古墳外形の復原

古墳の規模について、今回の調査で明らかになったいろいろな点から、築成当時の古墳を推定してみたい。

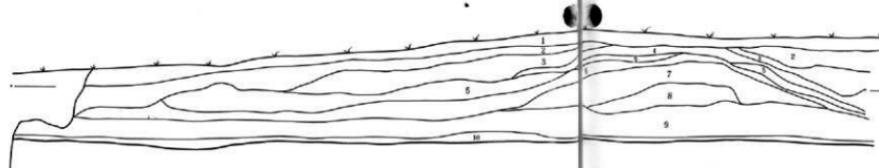
築造当時と現在とでは、墳丘の高さ及び土砂の量は大幅に異なっていると思われる。

墳丘の高さは、地元の人の話によると戰前は現在よりさらに約1メートル(3~4尺程度)高く、こどもの頃スキーをしたということである。このことから戰前において2.5メートルあったことは明らかである。また明治12年の際に土砂がとられているため、さらに高かったと思われる。これを裏づける一つの資料として、前述の宝曆11年3月の「高齋村明細指出帳」の記載がある。

この記録をメートルに換算すれば、「高さ4.5メートル廻り54メートル直径約17メートル」もう一つは「高さ5.4メートル廻り68メートル直径22メートル」となる。この二つのうちどちらかが上遠矢塚古墳に該当するか明確でないが、多分後者と思われる。この記録を100パーセント信用することはできないにしても、そう大幅なちがいはあるまい。当時は約4~5メートルの高さであった可能性は十分にある。他の古墳の例からしても、直径20メートルの古墳とすれば高さが4~5メートルあっても決して不思議ではない。

次に高さを約5メートル直径24メートルとした場合の古墳の盛土の量を計算してみると約1,100立方メートルとなる。また周濠の内径を28メートル幅5メートル深さ0.7メートルとして計算すると、約360立方メートルとなり、周濠の掘土だけでは約3分の1しか間に合わない。

次に高さを約4メートルとした場合は、盛土の量は約900立方メートルとなる。しかし必ず



第328図 墳丘断面図

しも全部が周濠の土砂とは限らず、県内で先に調査され報告が出されている周濠を伴う古墳である土矢倉古墳においても、周濠からの土砂は盛土の約3分の1でしかない。また仮に4メートルの高さとすれば、三段目からの版築用の土砂の量は約380立方メートルであり、二段目の構築には、ほぼ間に合う量である。

ここでは一応幅をもたせて、径約24メートル、高さ4メートル~5メートルの古墳と推定しておきたい。(安藤政信)

5. 墳丘内部の状況

A区墳頂部付近を広く表土を振り下げると、第2層中より拳大の自然礫が長径2.5メートルの範囲で検出された(第326図)。検出された礫群の広がり部分の石を一部取りはずすと振り方が表われ、主体部の存在を思わせた。礫群の平面図を作成しながら石を取りはずすと不整の円形を示す振り方が表わされた。礫群の中からは中世陶片や近世陶器片と共に鉄片、骨片が検出された。

礫群は上面に拳大の自然礫が密になり、その所々に遺物が点在している。人頭大の自然礫はその下部にあり、さほど密の状態ではなかった。振り方は礫群の広がりよりやや小さめに振り込まれ、深さ約70センチである。覆土は1層で、明褐色砂層のブロックが混入込んだ褐色土層で、一時に埋めこまれている。振り方の内部には何らの主体部施設がなく、底部も凹凸が著しい。これらのことを考え合せるならば、礫群中の中世、近世陶器片や鉄片、骨片の出土により近世時に擾乱を受けたものと思われ、主体部振り方も不整円形と規則性のない振り方である。付近の農家には本古墳より出土したという板状の石があると言われ、実見していないが、本古墳の主体部は組合せ箱式石棺と推測される。

墳丘断面図	
1層	耕作土(表土)
2層	赤褐色粘質層(黒褐色ブロックを含み硬い)
3層	赤褐色粘質層(赤褐色子を含み硬い)
4層	灰黄褐色砂質層(やや粘性をもつ硬い)
5層	黒褐色粘質層(3層と似る砂質ブロックを含み硬い)
6層	灰褐色粘質層(やや粘性をもつ硬い)
7層	灰褐色粘質層(やや粘性をもつ硬い)
8層	黑褐色粘土層(黒褐色ブロックを含み硬い)
9層	黒褐色砂層(頗る砂質土層)
10層	灰黄褐色砂質層(20mmの大粒を含む)古墳の基底層

従って礎石下の掘り方は、明治12年当時に内部主体を掘り出した痕跡と認められるのである。(野尻保)

6. 出土遺物

上遠矢塚古墳に設定されたトレンチの中で、A区の表土層、礎群、周濠、Gトレンチの礎群、Hトレンチの周濠、それにHトレンチの礎中から、縄文時代から近世以降に属する土器が出土している。これらの土器は、周濠及び礎群の年代、性格を考える一つの材料となる。そこで、以下、各トレンチごとに土器を中心とした遺物を略述する。

(1) A区、礎群、Eトレンチ

- A区表土層、須恵器1点、中世陶器1点、それに近世以降の陶器3点が出土している。須恵器は、壺の底部で、切離しに糸切り手法を用いている。底径5.8センチ。(第329図6)

- A区周濠、周濠の埋土下部から縄文土器6点、須恵器1点、土器6個体分出土している。

縄文土器は、文様の認められる4点を拓本に示した。(第329図1～4) 1は口縁が肥厚し、無文帯となって残される下部に斜縫文が回転され、2は、4条の沈線が縄文地の上に走る。3は沈線で区画された内部が擦消縄文となり、4は、粘土貼付文が特徴である。これらの縄文土器は、中期末から後期前半にその時期を比定できるものと思われる。

須恵器は、壺の底部破片で、底部切離しに窓切手法を用いる。(第329図-5) 底径6.1センチ。

土器は、少くとも6個体分出土している。壺の底部が3点あり、底部切離しに窓切りに糸切り手法を持つのが1つずつ認められる。他の3個体分は、変形土器で、器の外面や外面と内面の両方に条痕を持つのがあり、器厚が4ミリメートルと薄く、施成は堅く、表形ノ入式以降に時期比定されよう。

- A区礎群 A区礎群中より縄文時代から近世以降に至る時期に属する土器が、出土した。

縄文土器は、1点出土している。(第331図-1) 文様は、複節斜縄文の回転される上に3条の平行沈線で満文が施されている。大木8 b式併行と思われる。

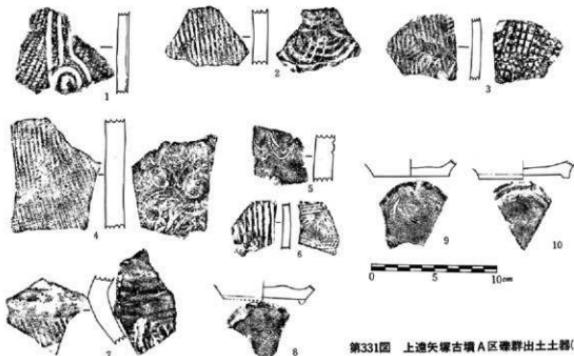
土器は、5点出土し、いずれも細片である。中に、変形土器の底部破片が2点認められ、他に器厚の薄い外面条痕を持つ体部破片がある。大部分は表形ノ入式以降に属するものと思われる。しかし、1点は、色調暗赤褐色を呈し、胎土は精選され、



第329図 上遠矢塚古墳A区出土土器(周濠埋土出土(1～5) 墓丘表土層出土(6))



第330図 上遠矢塚古墳Gトレンチ礎群出土土器



第331図 上遠矢塚古墳A区礎群出土土器(1)

年代の通り得る可能性を持つ。

須恵器は、甕の口縁部3点体部3点、甕の底部5点の計41点が出土している。

甕の底部破片4点が、台付甕で、また甕底部の3例は、糸切り手法である。(第331図8~10)

甕の体部破片の、第331図-5は、自然軋をもち、2条の沈線が施文されている。他は、外面に格子目、平行印目文をもち、内面に青海波文の認められるものが多い。

中世陶器は、灰褐色の色調を呈する珠洲系のもの11点、色調茶褐色を持つもの5点が出土している。

珠洲系土器は、甕の口縁部1点と体部が10点で、須恵器とは、外面に、斜行や羽状の条線状印目文をもつて区別され、内面にも印目痕を明瞭に残すのが多い。(第332図~1~8)大部分は、焼成、胎土とも不良のものが多いが、1点だけ、他に比して良好のが認められる。(第332図-5)

色調茶褐色を呈する5点のうち、4点は、甕形の体部破片で、他の1点は内面に、条線を持つすり鉢である。(第332図-11)

近世以降に属する陶器は、約120点出土している。その内の、約70点が磁器である。

陶器には、鉢、皿、甕などの器形が認められ、白釉、灰釉、鐵釉などが施されている。図示したもののうち、第4図12、13は、内面に細い条痕を有するすり鉢である。同じく、第5図2、3もすり鉢で、4は皿形、5は鉢形、それに、6、7は碗である。いずれも、江戸末葉以降県内各地に存在した民窯で焼かれた製品であろう。

磁器には、碗、皿、德拉形などが認められ、その大部分は輸入コバートを使用した染付があつて、明治以後に平清水などの民窯で焼かれた製品と思われる。(第333図-12~17)しかし、中に、輸入コバートを使用しない染料磁器があり、第333図-8、9は、碗形で、色調灰白色を呈し、低い器台を持ち、初期伊万里に類似が求められる。同じく、10、11も皿形を呈し、古伊万里である可能性が強い。

以上が、A区礎群から出土した土器であるが、この他に、現ではば全形のわかるもの2点と、細片となっているもの2点出土している。また、風化した鉄塊が4点出土している。

(2) Gトレチ

Gトレチの礎群より3点の土器が出土している。いずれも小破片であるが、1点は須恵質の土器で、破片の上部にわずかに条線が認められる。他の2点は、器厚約5ミリメートルで折返し状口縁が肥厚するすり鉢と内外とも暗紫色の釉が施される甕の台付底部片である。前者は、あるいは中世陶器に属し、後者は、江戸時代以後に

属する陶器と思われる。

(3) Hトレチ

Hトレチの周濠埋土中から繩文土器2点、土師器10点が出土している。すべて小片で図示しうるものはない。繩文土器は底部片1点を含み、胎土、焼成より中期頃に属するものと推測される。土師器は、糸切り底の底部が11点含まれる。他に、色調茶褐色を呈し、胎土の精選された感じの、年代の通り得る可能性を持つのが認められる。

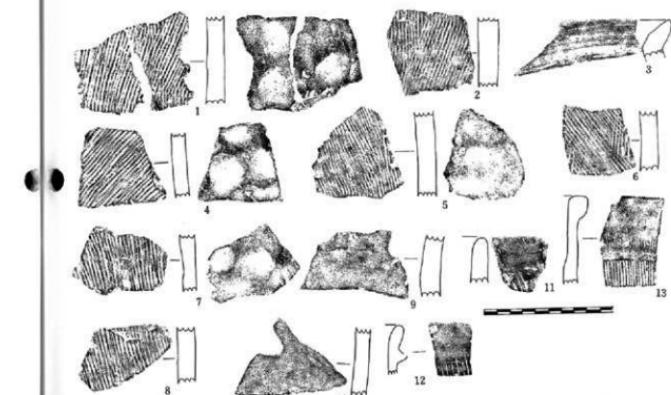
(4) H'トレチ

埴丘中央部を切断する形で設定したトレチの西端の礎群中から、繩文土器2点、石核1点、須恵器5点、中世陶器2点、近世以降の陶器2点。それに須恵質で、須恵器か中世陶器か迷うもの2点と時期不詳の土師質土器1点が出土した。

繩文土器は細片であるが、粘土紐貼付文が認められ、中期中葉頃に属するものと思われる。

須恵器は、甕形の破片で、水面に平行印目文、内面に青海波文をもつもの(第330図-1)、外面に格子目印目文をもつのがあり、他に底部破片が1点ある。

中世陶器は、色調暗赤褐色を呈し、表面がザラザラする感じで焼成の不良な体部破

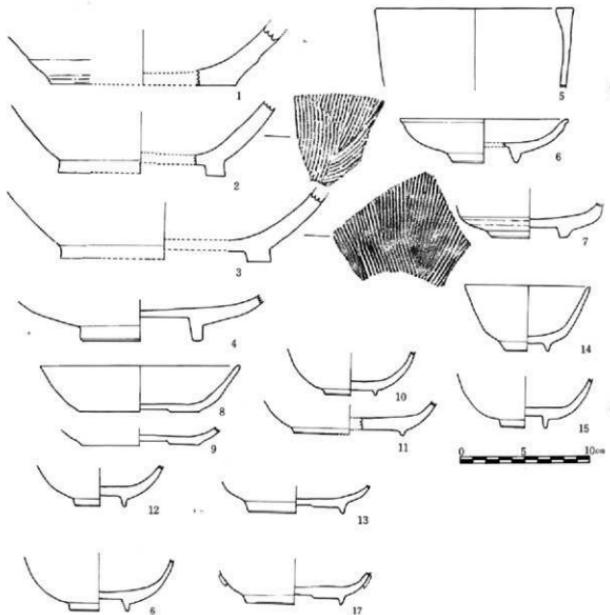


第332図 上遠矢塚古墳A区中央礎群内出土土器(2)
(中世陶器(1~10)、近世陶器(11~13))

片と、底径約14センチを測る、色調赤褐色で焼成の良い、内面のすり減っているすり鉢（第333図-1）がある。

近世以降の陶器には、色調茶褐色を呈し、時計回順方向に、約3.6センチの幅で11本の条線が上から下に引かれた底径8.6センチのすり鉢がある。（第330図-3）

以上、上遠矢塚古墳より出土した遺物を紹介したが、そのことにより下記のことことが推測される。



第333図 上遠矢塚古墳出土土器実測図（H'トレンチ(1), A区（2～15））

(1) 周濠中より出土した土器は、縄文土器、土師器、それに須恵器である。縄文土器は、縄文中期末葉から後期前半に属するものと思われ、土師器、須恵器の坏には、底部切離しに、糸切り手法と箋切り手法を持つのが認められ、下限としては、一応平安時代末葉ごろにおさえられよう。また、上限としては、色調、胎土から年代の遡りうる可能性をもつ土師器の存在があるが、細片のため定かでない。

そこで、周濠の築成年代は、平安時代以前となり、6世紀を測らない古墳との可能性を考えれば、周濠は、埋土中下部より出土した土師器から推測して、平安時代迄は明瞭な濠の形態を遺存していたものと推測されよう。

(2) 穂群中より出土した土器は、A区穂群、H'トレンチ穂群、Gトレンチ穂群とともに、比較的新しい陶磁器が出土している。とくにA区穂群中から出土した染付磁器の多くは、輸入コバルトを使用した明治以後に属する。同様に各穂群から出土した陶器も、江戸時代末葉以降県内各地に興隆した民窯の製品である可能性が高い。

これらのことより、これらのA区穂群、H'、Gトレンチの穂群らは、江戸時代末葉以降に形成された比較的新しい時期に属することが考えられる。

(3) とくにA区穂群中から、スクランプされた形で、縄文時代から江戸時代以降までの各種の土器が出土した。これは、古墳周辺の各時代の遺物が施棄されたと予想されるが、中世陶器や初期古伊万里焼、それに在地民窯の製品などが含まれ、興味深い。付近の住民の日常の雑用品が捨てられたともいえ、県内の土器論がようやく中世から近世まで視野に入れつつあるのを考えると貴重な資料といえよう。（保角里志）

註(1) 戸根与八郎「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告」

『埋蔵文化財発掘調査報告書—北陸高速自動車道—』新潟県教育委員会（1973）

（5）考察

1. 本古墳の築造年代と被葬者

かつて木棺をはじめその他の副葬品を多量に出土したといわれて、漠然と古墳として認識されてきたが、本古墳の実態についてはほとんど把握されていなかった。この度の発掘調査によって、本古墳の規模・形態・性格についてかなり明確に推定することができた。

既に述べたように本古墳は立谷川扇状地の扇端部に近い位置に築造された径24メー

トル前後の円墳であり、外周には巾5メートル前後、深さ50センチ乃至1メートル20センチ程の周濠がめぐらっていた。墳丘の下部と上部の墳頂部を囲むように巾1メートル余りの礎石帯が葺石状にめぐり、墳丘は版築によっていねいに盛り上げられ、また墳丘基底部にも整地地盤が用いられ礎石を敷くなどの痕跡が認められた。埴輪はなかったものと思われる。

内部主体は現墳頂の若干南側寄りに、掘り方より推測すれば長軸を東西にして、基底部を僅かに掘り込んでいたものようである。割竹形木棺が出土したとの伝承には疑問が多い。割竹形木棺は衛守塚古墳2号墳出土例に照らしても長さ5メートルを越えるものが普通であるのに、内部主体を埋置したと思われる掘り方は3メートル×2.6メートルにすぎないし、また明治12年发掘当時村役人から天童警察分署へ提出された書類の中にも、木棺が出土したとの記載は全くない。それに遠矢塚古墳出土と伝えられる石棺の一部と称する渠形灰岩の扁平な石材が近くの民家にあることをもってしても、組合せ式の箱形石棺が出土した可能性が強い。割竹形木棺の伝承は、同じ頃に掘られた衛守塚2号墳と混同されて伝えられたのであろう。

副葬品として甲冑・刀剣・土器・骨齒なども出土したと伝えられるが、所在不明である。これらの経緯を語る文書は残っているが、別紙として添付した図面もないため、具体的にそれらの形状を知ることができない。

しかしながら本古墳は、周濠を含めて30メートルを越す古墳であり、平地部にあるものとしては本地域ではかなり大規模な部類に属し、巾5メートルの周濠をもつ点から考えて終末期の古墳として位置づけることはできない。また平地部に築成された径24メートル前後の円墳であること、甲冑の残块が出土していることなどを考慮して前・中期の古墳である可能性は少ない。本古墳から出土した土器類の甕は現在所在不明であるが、引田式の時期のものという。甲冑などが出土したことより考えるならば6世紀前半に比定することがもっとも当を得ているといえるだろう。本地域の古墳をみると場合、6世紀代の古墳と考えられているものは、径20メートル及び30メートルの規模で周濠を伴うものが多いようである。葺石帯が二重に墳丘をめぐることも、比較的古いタイプを示し、人物埴輪や円筒埴輪を出して、内部主体が箱式石棺である上山市土矢倉古墳より若干古い時期の古墳と考えて大過ないであろう。

立谷川扇状地扇端の山形市七浦・中野・漆山・灰塚・天童市清池・高巒・塙野目には古式土器やこの時期の集落跡が発達し、この近くには清池西遺跡・高田遺跡などより古墳時代後期初頭の土器が発見されている。遠矢塚古墳は、これら集落の東側のやや高い土地を占め、集落を見下す位置にあり、立谷川より北の現天童市の南西部

に古くから形成された水田農業に従事するいくつかの集落群を統合し支配する首長の墳墓にするにまことにふさわしい。

この古墳の周辺にある漆山の衛守塚古墳群中の2号墳は、これよりも古く出土遺物より5世紀後半に位置づけられるが、もっとも近い火矢塚1・2号墳、下遠矢塚古墳などは、これと相前後する時期に営まれた古墳であろう。

被葬の年代や被葬者の性格を把握する上でもっとも重要な資料となる遺物の内容がほとんど不明な現時点での推測するとすれば、これ以上言及することはできない。(川崎利夫)

2. 本古墳と周辺の古墳及び古墳時代遺跡

上遠矢塚古墳付近には、既に述べたとおり下遠矢塚古墳、火矢塚1号墳、火矢塚2号墳など何れも墳丘を高く盛った高塚古墳が存在する。宝曆11年の「高櫻村明細差出帳」によると、上遠矢塚の周囲38間、下遠矢塚30間と記されている。それによれば下遠矢塚は上遠矢塚より一まわり小さく径20メートル前後の円墳であった。それは現保育専門学校の東側の果樹園にあったといわれ、そのあたりは地下に礎が多く、付近の畑地とは土中のようすがちがうといわれている。墳丘築成の際の地表の痕跡であろうか。この塚は明治35年高櫻小学校敷地造成工事によって土取りのため土砂が掘りおこされ、姿を消してしまったが、出土物は何ら認められなかったという。上遠矢塚古墳との距離は、西北に向かって200メートルである。

火矢塚古墳群は、清池八幡社の南の水田中にあったといわれ、立谷川の自然堤防上にある。遠矢塚古墳群同様20メートル前後の円墳で、約100メートルの間隔で2基並んでいたという。水田中にあった2号墳は、昭和27年頃の土地改良工事で削平されたが、それまでは存在していた。その時は出土物がなかったが、墳丘を削平して後の地下に鉄の細長い棒状のものが多数発見され、そのまま地下に埋めた旨伝えられている。もしそれが真実とすれば、鉄錐か鉄製直刀が何本か埋っていたものと考えられる。そして2号墳は明治12年頃の国道改修工事の際に崩されたが、割竹型木棺が出土したと伝えられる。同じ塚漆山の衛守塚2号墳、上遠矢塚などから同じ割竹型木棺が出て居り、この2つは現物が残っていたり、届出書があつたりしてそれらが明白であるが、火矢塚1号墳はこれらと混同して伝えられているふしもあり、疑わしい点は否めない。これら2つの古墳は、現存しないが遠矢塚古墳と規模も同じであり、余り隔たりのない時期につくられたものであろう。

立谷川をへだてた南の山形市漆山には衛守塚古墳群や柴崎古墳群がある。何れも扁平な石材を組み合わせた箱式石棺が出土している。衛守塚古墳群は出羽小学校の北側

にあり、柴崎古墳群は漆山駅の西側にあった。水田下よりまま石棺が出土するが、もっとも著名なのは割竹型木棺を出土した衛守塚 2 号墳で、火矢塚古墳群との距離は、南へ約 1.2 キロである。この古墳も明治 12 年の国道工事中にとりこわされ、その際墳頂下 4・5 尺で腐朽した鉄片が出土し、その下からさらに 5 尺下で割竹型木棺が発見された。全長 2 メートルほどの木棺は東京国立博物館に保管されている。副葬品は櫛残片 6、弓残片、曲物残片、埴型土器 2、石製模造品等であった。本古墳は高さ 5 尺内外、周囲 20 間ほどの円墳で、墳丘の周囲に円筒埴輪をめぐらす代りに長丸太が 2・3 尺の間隔で打ちこまれていたという。本古墳の年代は出土した土師器や石製模造品より 5 世紀後半と推定する説が最近有力になってきた。従て遠矢塚や火矢塚古墳群は、衛守塚古墳の直後か、あるいは数十年を経ずに築造された可能性が大きい。

火矢塚古墳群や遠矢塚古墳群が衛守塚 2 号墳と立谷川を隔てて至近距離に存在することは、何らかの意味で衛守塚古墳を意識して築造していることを示し、出土物がきわめて類似していることも緊密な関係があったことを暗示している。立谷川をはさんで異った集団が存在し、対立抗争の関係にあったか、又逆に南と北との同盟関係、あるいは同族が進出して地域の政治集団を統率することになったか何れかであろう。

当時の集落は扇状地扇端部にあり、遠矢塚・火矢塚古墳の周辺では、清池の西側の水田や高瀬南の高田あたりから、南小泉式より栗圓式にいたる土師器が発見される。また少し離れるが塙野目からも埴籠式など 4 世紀末から 5 世紀ごろの古式土器を出土する遺跡が認められている。これらの遺跡の規模や範囲については、まだ発掘調査などが行われていないので不明な点が多いが、すでに 5・6 世紀より集落を營み、湧水帯の水を利用して水田耕作に従事していたことは確実であろう。立谷川の南半の山形市においても事情は同じで、七浦・漆山・明治地区などの水田中から古墳時代の集落の存在を示す土器が多く発見されている。

これらの集落は相互に開田や排水あるいは氾濫対策などの利害を共通にする集落が結合し、土地と水利を基軸とする地縁的な農業共同体を形成した。そしてその内部での生産への要求と人口の増加は必然的に大規模な協業化を促し、農業共同体の首長権を強化する結果になったものと思われる。これら政治的結合体の長であった人びとの、他の共同体員に対する権威と権力を持続するものであり、優位性を示すものとして古墳が築造されるのである。

遠矢塚古墳群にしても、火矢塚古墳群にても、低湿地の湧水帯を見下す敵高地上にあり、集落全体から望まれる場所に位置している。立谷川扇状地上で水田耕作に従事し、その豊かな土地と水を背景に生産力を高め、生活を展開していた初期農耕集落の

政治的結合体の長であった当時の支配者の墳墓として本古墳も成立したのであろう。

立谷川扇状地上に成立する 5 世紀後半及 6 世紀の古墳が、大きさにおいても 20 メートル前後の円墳で、内部主体が割竹型木棺で、それに埴輪を伴わない点などの共通的な類似は、これらの古墳が相互に密接な関係をもっていることを示している。同盟あるいは同族的関係の他に、これらの首長の背後にさらに優位に立つ首長が存在し、そのための規制によって相互に抜きんぐるような行為ができなかつたことを示しているとも考えられる。

7 世紀になると、山形盆地内でも山形市谷柏古墳群や御花山古墳群などにみられるように箱式石棺の小規模な群集墳が増加するが、共同体内部での各家族の自立化がすすみ、かつての共同体首長の権力が弱体化するという社会関係の変化をものがたる現象をそこにつくことができる。市内でも原町八幡山古墳群や成生古墳群などは、これらの終末期に位置づけられる古墳である。

このように地域の古代の歴史を刻みつけた、市内で現存するたった一つの上遠矢塚古墳は、未来のためにも失われることのないよう手厚い保護がはからなければならぬ。(川崎利夫)*



(1) 上遠矢塚古墳の現況



(2) 上遠矢塚古墳の墳丘部

第335図



(1) 表土除去後の A 区



(2) A 区の砾石群



(1) A区の周塗より見た填顶部



(2) A区周塗の断面

第337図



(1) Gトレントの周濠



(2) Hトレントの周濠



(3) Hトレント
周濠断面



(1) H'トレンチ（墳丘切断）



(2) H'トレンチ断面

第339図

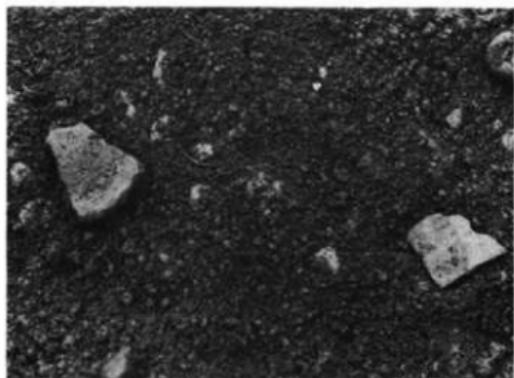
(1) A区中央礫石帯の調査



(2) A区の雑草の状況



(3) 須恵器破片の出土状況





(1) Gトレンチ周辺部の発掘



(2) Gトレンチ墻丘部の礫石帶

第341図



(1) Fトレンチ礫石帯



(2) Cトレンチ礫石帯

(1) A区中央南よりの
礫石群



(2) A区周濠の起ち上がり



(3) Gトレンチの周濠

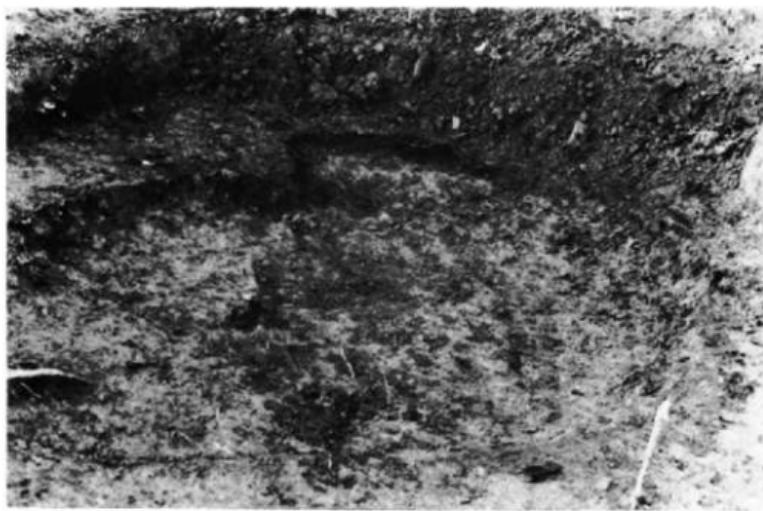


第342図

第343図



(1) A区掘りかた上の砾石



(2) A区墳丘中央南よりの掘りかた（内部主体埋設場所）

(表)

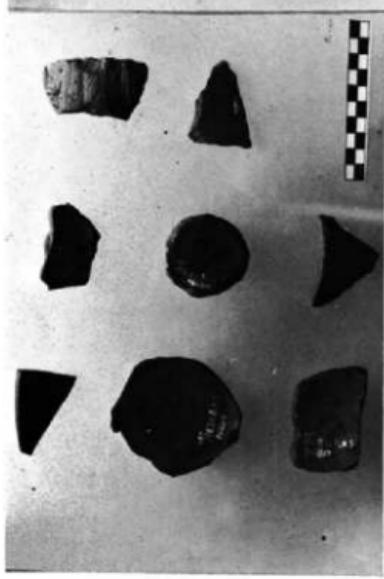
(表)

(表)



第344図 上連矢塚古墳出土遺物
Gトレンチ発群 中段 下段 A区表土層
(表)

(表)



(24)

第345図 上達矢塚古墳出土遺物
A区群 編文土器・須恵器・土器片



(25)

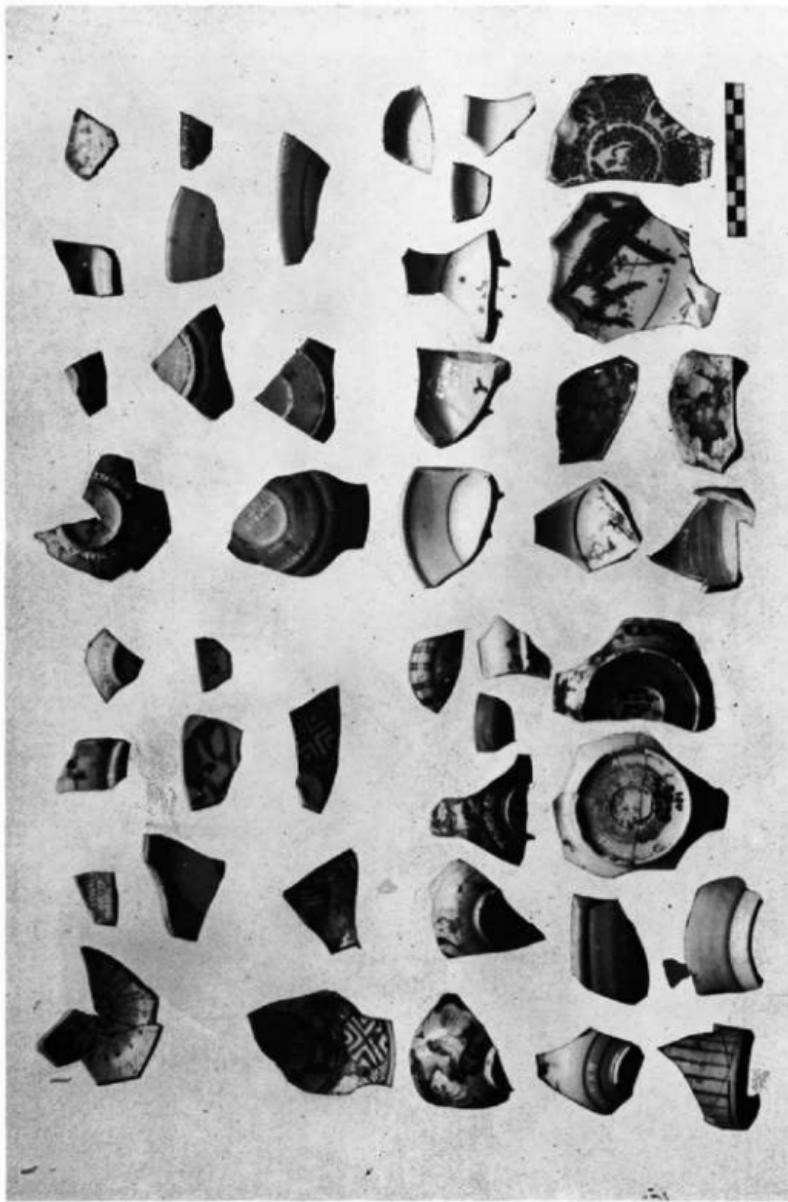
第346図 上達矢塚古墳出土遺物
A区群 編文土器・土器片・須恵器 (1)

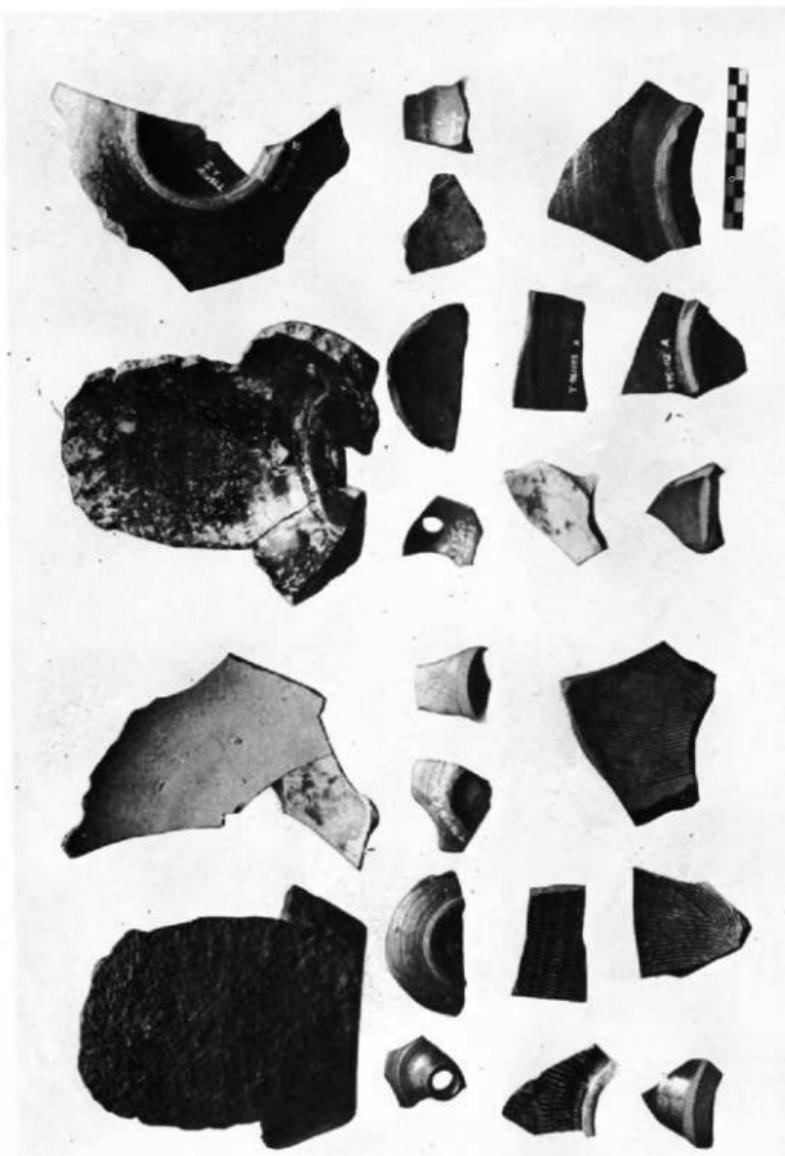


(26)

第347図 上達矢塚古墳出土遺物
A区群 中世陶器 (2) 珠網系土器

第348圖 上遷矢塚古墳出土遺物
A区罐群 磁器 上段（1~3段）初期·古伊万里



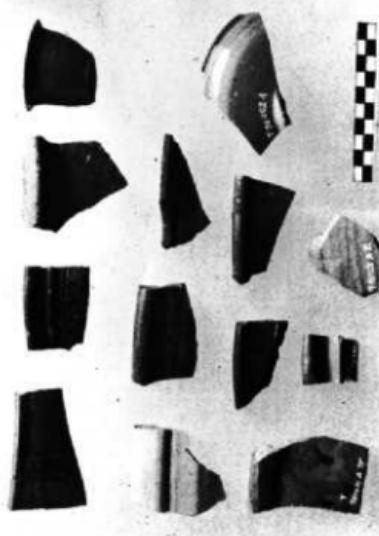


第349図 上述矢塚古墳出土遺物
A区罐群近世以降陶器（1）

(1)



(2)



第351圖 上塘尖腳古墳出土遺物
A區破片 須思器 (2) 中世陶器 (1)

(1)



(2)



(1)

(2)

第350圖 上塘尖腳古墳出土遺物
A區破片 近世以降陶器 (2)

第351図 上遠矢塚古墳出土遺物
A区附近世以降陶器 (2)



(表)

第352図 上遠矢塚古墳出土遺物
H'トレンチ標群



(表)



第353圖 上逮矢塚古墳出土遺物
A区砾群遺物